

会場には早めに行く。

それは「自分の身体を開始時間前に会場に運ぶ」という意味で、ものがたりの会を確実に始められるようにするための大前提だが、もうひとつ大事なのは参加者が入場する前に会場の下見をさせてもらう時間が必要だからだ。

小学校なら 30 分前に着けばまにあう。

ぼくの語りの時間は授業の何時間目かを使って 45 分単位で企画されるのがふつうだが、生徒たちがその前の授業を終えて、会場の特別教室や体育館に移動してくるのはせいぜい開始 5 分前だから、それで下見の時間は十分にある。

だが、図書館や市民会館でする場合は、もっと早く行く。

開場が開演 30 分前のケースが多く、下見はその前にすませなければならないからだ。

時間はあまるが、図書館では下見をすませた後、中に放し飼いにしてもらえれば時間はいくらでもつぶせるから、いやではない。

時には司書さんが特別に、ふだん開放していないバックヤードに連れて行ってきて古い郷土本を見られたりする役得もある。

さて、では下見と言うのはなにをすることか。

ただ、形式的に見せてもらうだけではなんの意味もない。

ものがたりの会をみなでいっしょにものがたりの海に船をだす航海と例えれば、会場はまさにみんなを乗せる船そのものだ。

だから、出航前に船の具合をチェックし、修正できる点はするのは、船長である語り手の当然かつ重要な仕事なのだ。

まず照明を見る。

ふつうの教室や会議室ではスイッチはオンかオフのどちらかしかないが、照明の明るさや方向を変えられたり、スポットライトがあるホールではいろいろ試させてもらう。

当然、ステージの上は明るい方がいい。

ステージが暗くて語り手の表情がよく見えないと聞き手にはストレスになるし、全体の気分が沈む。

その場が明るいというだけで自然にみんなの注目を集められるし、場が華やぐ。華やかさはいつもと違うハレの日の気分を漂わせ、とくに子どもたちを少し嬉しい気分にする。

だから真上からの照明があれば、たいていつけてもらう。

まぶしいのや暑いのは自分が我慢すればいいのだし、じきに慣れるものだ。

ただし、真上からの照明は注意しなければいけない点がある。

お客に近い位置で語ろうとするあまり、前に出すぎると、光を後ろから受ける形になって顔が陰になってしまうのだ。

実際、それでシルエットを見ているような語りのステージにでくわしたことがあり、以後、気をつけるようにしている。

下見の段階で照明の下に立ち、位置をずらしてみ、いあわせたスタッフに自分の顔がどう見えているかチェックしてもらえば、この失敗はなくなる。

ステージは明るいのがいいとして、では客席の方はどうなのかというと、これは語り手の好みになる。

ぼくは客席がうす暗いくらいの方がおちついて好きなので、客席の照明が調整できるときはいくらか落としてもらおう。

一方的にものがたりを届けようとするなら、浜辺でたき火をしながら一人で夜の海に向かって話しているくらいの明るさが理想かもしれない。

映画館のように客席は真っ暗でいい。

映画の観客は映画を見る以外にすることはないので、見やすさが一番だ。

客席が明るくてステージから客の顔が見えると、話ながら、つい、よけいなことを考えてしまう。

まして、知り合いがいたりするとなおさらだ。

だが、ものがたりライブは一方的にものがたりを届ける会ではない。ものがたりを素材にして楽しい時間を共有しようという場だから、ほんとうにまっくらにするわけにはいかない。

聞き手の反応を見ながら次の話を考えるのだから、客席がまったく見えないのはこまるのだ。

また小さい子が多い時は客席もいつもより明るくしてもらおう。その方が子どもが安心する。

照明係がいるホールで、明かりをパーセント単位でしぼれたり、色をつけたりできる場合は、明暗を活かせる話を選んでする。

せっかくそういう設備があるのなら、活用した方が楽しい。

暗くて楽しいのはもちろんおばけ話だ。

軽いおばけ話でなく、本格的な怪談をするときは、だいたいのストーリーとここで明かりを落としてほしいというきっかけのセリフを書いて、照明係の人に渡しておく。

口で言うだけは間違いのもとだし、紙に書いて渡すと係りの人が安心する。ものがたりが進んで行って、みんなが「そろそろ出るぞ」と思いはじめたあたりで、灯がスーッと落ちていくと、聞いている子どもたちの緊張感は一気に上がり、部屋中が水を打ったように静かになる。

こういう時、みんなでいっしょに楽しむものがたりのだいご味を感じる。

本では味わえない、毛穴からしみこんでくるようなゾクゾクした感覚がある。

光と闇の力は大きい。味方にしなければ。